

花田清輝

二十世紀の孤独者

関根弘



シリーズ
民間日本学者
12

花田清輝

二十世紀の孤独者

関根弘

リポート

はなだ きよてる
花田清輝

——二十世紀の孤独者

せきね ひろし
関根 弘

1920年 東京浅草に生れる。
詩人。

〔詩集〕『絵の宿題』
『阿部定』
『泪橋』、他。

1987年10月30日 初版第1刷発行

著 者 関根 弘

発 行 者 小川 道明

定 価 1400円

株式会社 リプロポート

〒 171 東京都豊島区南池袋 1-16-22
西武流通事務館

電 話 東京 03 (983) 6191

© 1987 Printed in Japan

装幀／平野甲賀

編集協力／赤岩なほみ

編集担当／早山隆邦

印刷・誠和印刷 製本・大口製本

ISBN 4-8457-0288-6 C0023 ¥1400E

ムッソリーニ、ベニト 209
村井志摩子 192,195,197-200,203-
205,208,225,236,238

モーム, サマセット 56
モンドリアン, ピーター 212
モンロー, マリリン 231-232

ヤ行

保田与重郎 31
柳田邦男 223
山室 静 156
山本常朝 35
吉本隆明 81,94-95,152,163-166,
170,174-175,181,184-189,201,
208,210,218-219,230

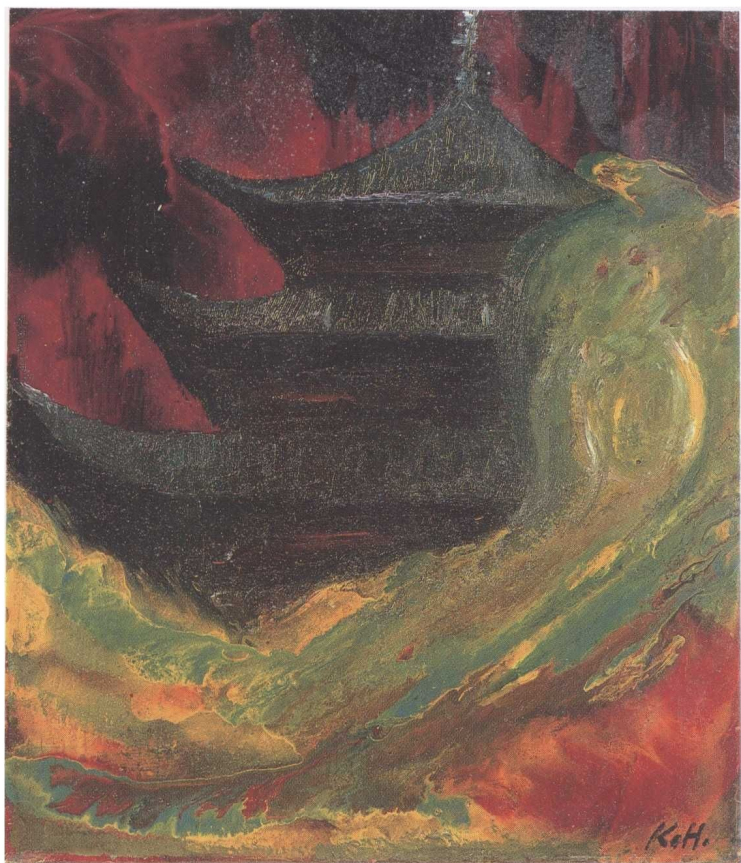
ラ行

ラディゲ, レイモン 53-55
李承晩 133
リスト, フランツ 125-126
リルケ, ライナー・マリア 240
ルナチャルスキー, アナトリイ
104

レスコフ, ニコライ 57
レーニン 64,81,143,146
魯迅 18,20,22-25,32,256,258,261

ワ行

ワイルド, オスカー 15
渡辺一夫 113



花田清輝作「みどりの焰」(「序詩」参照)



1946(昭和21)年 37歳の頃

花田清輝―二十世紀の孤独者― もくじ

序詩 みどりの焰

I 首が飛んでも……

II 神話はデマのなかにある

III 軍事工業新聞時代

IV 楳田幻想の核心

V 夜の会と共同制作の提案

VI 笑う男から笑い猫へ

VII 戦争責任めぐる論争

7

11

29

51

73

97

123

149

VIII 恋愛事件の謎をとく

177

IX 映画的思考とリアリズム

201

X ワンマン芸術運動

225

あとがき

261

年 譜

265

人名索引

装幀 平野甲賀

口絵写真提供 筑摩書房

花田清輝——二十世紀の孤独者——

わたしは、飛んだり、跳ねたり、大騒ぎをしながら、小川を泳ぎくだつてくるナマズをみても、指一本うごかそうとはしない冷静な男の分別を、かならずしも過小評価するものではないが——しかし、不可能の可能性を信じて、瓢箪でナマズを押えつけようとする騒々しい男のなりふりかまわぬ無分別な行動をせせら笑おうとはさらさらおもわない。くりかえしていうが、そこには、個人主義の粹のなかにおさまりきれない、やむにやまれぬ何かがある。

花田清輝（「ナマズ考」から）

序詩 みどりの焰

仏舍利塔が緑の焰に包まれている

花田清輝の描いた「みどりの焰」という

油絵がある

かはたれどきの浅草観音境内で

五重塔のシルエットを

美しいと思つて眺めたとき

記憶の底からよみがえつてきた

新日本文学会の壁にかかつていた筈だ

銅で裝飾された建築物が燃えるとき

銅イオンの反応でみどりの焰ができる

「平家物語」の時代に

東大寺が炎上したとき

みどりの焰に包まれた

大仏の首が白熱の光を發し

ごろりと落ちた光景は

この世ならぬ有様であつたろう

塔の燃えつきる姿も

これに劣らずすさまじかつたにちがいあるまい

建築評論家川添登の推理にもとづき

これだ！ 画題をえて

スプレーでカンバスに絵具を吹きつけ

一気に仕上げて

新日文の運動資金稼ぎのため

新日文展に出品したいきさつは

「芸術及び芸術運動」*にくわしい

花田清輝の史観によれば

日本の中世は

余計な近代を通過せず

モンゴルなどと同様

一挙に超近代化する可能性を秘めていた

それかあらぬか

「かげろう紀行」^{＊＊}では

モンゴルに似た草原に立つ

一本のニレの木の葉が

白昼 かげろうのスクリーンを通して

みどりの焰と化し

ラマ寺院を包みこみ

メラメラと燃えあがる！

＊ ＊
『花田清輝全集』十三卷六八頁。
＊ ＊
『同』十四卷四六九頁。

I 首が飛んでも……

あまり気取った書き方をすると、途中で苦しくなって投げ出したくなるかも知れないから、できるだけ力を抜いてとりかかる。まず花田清輝のことは、花田清輝自身に語らせるのが一番良いだろう。初期のエッセイ、「粉挽場で」（『文化組織』一九四一年二月号）の書き出しはこんなふうになっている。